関西大学学術リポジトリ
Kansai University Institutional Repository

貝多羅経随想

著者	下間 頼一，佐々木 尭
雑誌名	阡陵 ： 関西大学博物館彙報
巻	69
ページ	6-7
発行年	2014-09-30
URL	http://hdl.handle.net/10112/00023848

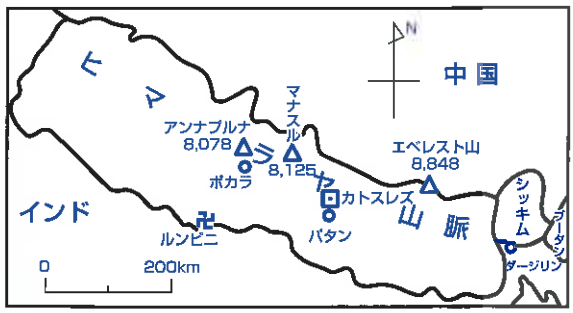
貝多羅経随想

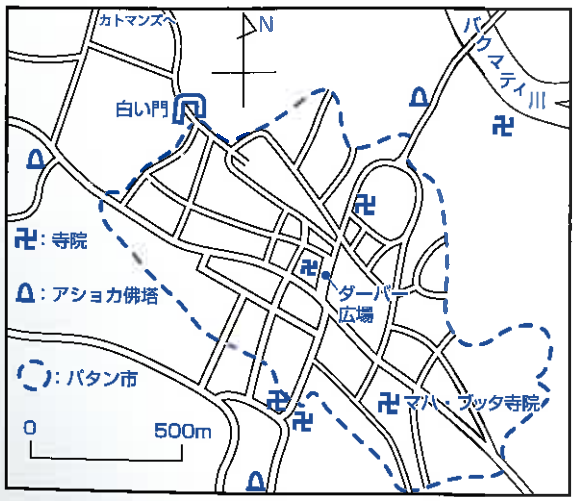
下間頼一・佐々木　尭

1980年12月25日より1981年1月9日まで、小沢康美氏（福井工業大学教授　当時関西大学大学院生）と、冬休みを利用してネパールへ調査研究の旅に上った。一仏教徒として釈尊生誕の地 Lumbini（ネパール南部インド国境に近い）への参詣と、技術文化史の実地調査が目的である。貝多羅経1冊を1981年1月4日首都カトマンズの南15km にある小都市国家 Patan の骨董店で購入した。

Patan は Lalitpur とも呼ばれ、Baghmati 川南岸の丘の上の芸術の都。優れた宝石加工や金属加工技術を今に伝えている。グルカの進攻に備えた城郭に囲まれた小都市国家の様な町である。7世紀中頃に建設され、中世にマッラ王朝の主要都市として栄えた。1639年パタン王朝成立により首都となったが、1768年グルカ王朝に征服された。

人口は約13.5万人（1970年推定）、大半がネワール族。北部ヒマラヤ山麓にはシェルパ族やタカリー族など山岳少数民族が住む。彼等は山道で鍛えた強靭な体力と精神力を持ち、親切であった。





Patan 北西の白い Patan Dhoke（門）より入市、狭い暗い石畳みの Khacha Tole（通り）を進む、先ず Hiranya Barna Mababihar（仏教寺院）へ参詣する。Golden Temple とも呼ばれ、内院は金色燦然とし、重厚敬虔な雰囲気に満ちている。次いで Museum や Old Royal Palace of Mallaperiod へ。中庭に Sila（石）Patra（紙）of Licchibi（リチビ）Lipi（文字）の碑が立つ。高さ65cm、幅34cm、厚さ11cm の石碑に碑文がぎっしり刻まれている。早速乾拓を取る。

市の中心 Durbar Sqare（ダーバー広場）へ到着した。朝霧濃く、人影は少なく、静謐な仏教的な雰囲気が満ちている。朝の冷気を胸一杯に吸い込む。周りは寺院が軒を連ねる。北方より反時計回りに小さな Narayan 寺院、中くらいのBhimsem寺院、立派な3層のKrishna寺院、2層の Char Narayan 寺院、3層の Radhn Krishna 寺院、Big Bell（鐘楼）、壮大な3層の Radha Krishna 寺院（Chayasn Devel）と連なる。寺院は精巧な木彫で飾られている。透かし彫りでリアルで精緻である。

祖形仏教にヒンズー教とチベット仏教の影響が濃い。宗教的内容は一介の訪問者には理解しがたい。祖形仏教の色濃い寺を訪れ僧達と阿弥

陀経をあげ、焼香し仏教徒としての一体感に浸った。市全体が仏教的雰囲気に包まれ、ネワール族は敬虔で礼儀正しい。合掌し「ナマステ」。

ダーバー広場を出て南東へ狭い小道を進むと、Maha Bovdha Mandir 仏寺に至る。999体の石仏がきりっと立っている。この寺の隣の骨董店で貝多羅経を購入した。長さ31.2cm、幅5.3cm 全厚さ2.5cm。37枚のバイタラ葉を重ね、厚さ4.4mm の板 2 枚で挟む。貝多羅はサンスクリットpattraの音訳で、植物の葉の意である。

インドではシュロ（棕櫚）科のターラ樹の葉は古来書写材料として用いられた。ターラの葉は薄く強く、長大で長さ 3 m にも達する。葉を乾燥させ、長さ45～60cm、幅 7 cm 位に切り揃え、両面に stylus 鉄筆又は堅木の尖筆で文字を書くと、黒い樹液が染出て、ペンにインクを付けて書いたように文字が美しく浮かび上がる。仏教の経典など書写するのに用いられる。数十枚重ね、中央に 2 カ所孔をあけ紐を通して綴じる。同寸の木の板を表裏に添える。

インド・ミャンマー・チベットなどで仏典は貝多羅に書かれ写され伝えられてきた。他に医薬品の調合法など日常用にも供された。購入した貝多羅はインド系のシンハリ文字が表裏にぎっしり綿密に書かれていた。

インドは 2 百の言語、百の文字と俗に言われている。貝多羅は紙・パーチメント（羊皮紙）と共に古代の主要な書写材といわれる。

オリエントに弘通するセム系文字の影響を受けブラフミー文字が生まれ、更にカロシュティ文字が生まれた。ガンダーラ地方で調査した仏塔に寄進者の名前がカロシュティ文字で刻まれていた。インドが文字使用を始めた時、文字と共にヤシ科の葉が書写材として利用された。

熱帯のヤシ科植物は実に3000種に上る。パルミラヤシとコリハヤシが南アジアや東南アジアで用いられた。筆者が入手した貝多羅葉は薄く繊維が細く整っていることからコリハヤシと考えられる。書写法はペン書きと、線刻とがある。入手資料は鉄筆書きである。

本資料の文字は崩れた丸文字で判別しがたいが、長い渦巻状の文字等の特徴により、シンハラ文字と推定される。古来インド北西部に居住していたシンハラ族が、アーリア族の南下やドラビタ族との関係で遠く海路スリランカに仏歯と仏典を持って移住した。

現在シンハラ族はスリランカ人口の 7 割を占める。

シンハラ文字はデヴァナガリーやタイ文字と同系で独特のうず巻き型をした表意文字である。ラテン文字と異なり、子音だけを表す文字はなく、すべて母音を含んでいる。基本字として54文字がある。

パピルスやパーチメントは過去のものとなったが…　貝多羅は 2 千年近い歴史を持ち、今なお用いられている。文字の不滅の生命に感銘をうけた。

書写材と文字に関し、安江 明氏の論文より多大のご教示を頂いた。深謝いたします。

文献
安江 明　やしの葉写本研究ノート
図書館人文科学研究科アーカイブス学専攻

下間　頼一：名誉教授
佐々木　尭：文学研究科博士課程後期課程在学